若　者

日々思うこと

今　中　忠　行*

1973年春より翌年秋まで1年半の間ボストンのMITで研究する機会を得ました．その間，単に大学での研究生活のみならず，買物，旅行など一般社会生活を通じて異なる文化に接することができたのは，私にとって貴重な体験でありました．短い滞米生活だったので必ずしも的を得ているとは言えませんが，ここでは日本とアメリカにおける研究・教育環境の特質について感じたことを2，3記してみたいと思います．

一口に言って，〝日本は身内社会であり，アメリカは契約社会である〟というのが率直な感想です．米国には世界中から多くの民族が集まっており日常生活における価値基準がまちまちですから，それを統一する必要が生じたのは必然でしょう．その結果，個人の責任を明確にして契約を結ぶことにより相手を信用することができ，またその契約を有利にするために自己主張が強くなったと考えることもできます．その典型的な例を大学教官の雇用制度にもみることができます．大学院を出て Ph.D を獲得した学生は先ず公募により assistant professor になることを希望し，適当な職がなければ2～3年は研究員としての生活を送ることになります．米国には日本の大学助手に相当するものが無く，年令的な比較からいえば日本の助手は assistant professor に．助教授は associate professor に，日本の教授が full professor に対応するといえるかもしれません．彼らが assistant prof. になる場合，先ず3年契約をするのが普通です．そして講義を担当し，彼自身の研究室と学生を持ち，その学生に対する学位審査権を有するのですから，その権利と義務の観点からすれば日本の大学教授とよく似ています．その3年間に十分な教育，研究を行なう能力が不足していると判断されれば契約は更改されずいわゆるクビとなるわけです．時には6年 assistant prof. をつとめる人もいます．努力が認められて associate prof. になっても安心することはできません．何故ならば associate prof. として不適格と判断されたならばクビになるからであり，彼らは身の安定のために tenure（終身その大学で働くことができる権利）を得んがためにより一層の努力をします．tenure が認められたならば早く full prof. になるために頑張ります．full prof. になってものんびりせず，よりよき研究とより多くの研究費獲得のため日夜努力しているようです．その結果，同じ full prof. と言っても千差万別で，中には20人もの研究員を擁して研究に没頭している教授もいるわけです．このような競争に勝ち抜くために彼らは人一倍勉強し，必要とあれば異なった分野の学者ともすぐ協力し合うのは当然のことでしょう．良いアイディアをもとに研究費を得ればそれにより秀れた研究員と学生を集めることができ，その結果次の研究費を得るという好循環になります．しかしこのようなシステムに問題点がないわけではなく，研究費を得るため2～3年内に結果の出るものや流行のテーマを追うという傾向も強く一部にはあるようです．一般にアメリカでは能力があり努力すればそれ相応の研究体制を整えることができる一方，努力を怠れば惨めな結果が自分にはね返ってくるといえるでしょう．

これは学生に対してもそのまま当てはまることです．能力のない学生は退学または転学を余儀無くされます．働かない学生を引き受けることは，努力して集めた研究費を浪費することになるからです．これに反し，有能な学生にはその能力を十分に生かすためのシステムが用意されています．所定の単位を修得すれば，標準期

* 今中忠行（Tadayuki IMANAKA），大阪大学，工学部醗酵工学科，助手，工学博士，生物化学工学

間よりも早く大学卒業や Ph. D の取得が可能です．私の滞米中のことですが，同時に6つの称号（Ph. D，機械工学の修士と学士，経済学士など）を取ったのはＭＩＴの新記録であるというニュースを読んだことがあります．また私の知っている優秀な大学院生はＭＩＴの生物学と Harvard Medical School に同時に在学して勉強していました．これらの例は日本では不可能なことなのです．

日米に限らず世界中いずれの国においても，それぞれ固有の風土と歴史に基づく文化があり，一断面だけでその特質を比較説明できるものでもなく，いわゆるセットの文化ということもできましょう．物には長所短所が表裏一体になっていますが，米国での長所と思われる点を変形して日本での生活に導入すれば，プラスアルファの生じる可能性があると思われます．

以上述べたアメリカのシステム，考え方に対し，日本では一見ぬるま湯的環境であり，仕事をしてもしなくても済ますことができます．しかしこのような日本のシステムは考え方によっては大いなる長所にもなり得るわけで，息の長い仕事，基礎的な原理に迫る仕事を無名の研究者が手がけることも可能になります．こう考えてきますと，当然のこととはいえ，研究者が精一杯勉強し，失敗を恐れず前進する勇気を持ち続けることが日本のシステムを有意義ならしめるものであると言うことができましょう．